彙報

第五八回野尻湖クリルタイ

中村　篤志

第五八回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）は、二〇二二年七月一六日（土）～翌一七日（日）にわたり開催された。新型コロナウイルス感染症の影響で、本年も原則オンラインによる開催となったが、学会幹事と希望する報告者のみ長野県野尻湖畔の藤屋旅館に宿泊し、配信や司会・報告を同旅館から行った。一昨年は中止、昨年はオンラインでの開催だったことと比べれば、わずかではあるが前進したといえる。参加者はほぼ昨年並の六四名であり、多くの参加者を得たこと、初参加者や久しぶりの参加者を迎えることができたことも、昨年と同様であった。全参加者が近況を報告し合うコンフェッションは、今年もオンライン上で小グループに分かれる形で実施したため、ここでは省略し、以下に研究報告の概要を記す。なお慣例に従い、報告者の敬称は省略した。

白　那日蘇（神戸大学）「内モンゴル近代における「蒙古軍政府」の成立について」は、内モンゴル近代における「蒙古軍政府」の成立（一九三六年）において、徳王の自治独立運動、徳王と李守信の連携、関東軍の内蒙工作及び募兵工作が、それぞれどのような役割を果たしたのかを検討した。

まず、徳王の指導した内モンゴル自治独立運動では、「各盟旗の団結」を図り、内モンゴル西部地域に独立政権を樹立するための政治活動が展開された。また北京蒙蔵学校学生、在京蒙古人との団結を主張しながら、中華民国国民政府の承認を得るため、蔣介石と接触していた。後に、第一回百霊廟会議、第二回百霊廟会議を次々と開催し、一九三四年四月二三日に百霊廟蒙政会を成立させた。この蒙政会の構成員が「蒙古軍政府」の主なメンバーとなる。次に、一九三五年一一月、徳王と李守信は協力関係を確認した。元々蒙政会には充分な兵力はなかったが、蒙古軍政府が成立する際に李守信の部隊を蒙古軍第一軍として編成し、兵力を補うことができた。最後に、蒙古軍政府成立前後に、関東軍と徳王の協力のもとで行われた「募兵工作」によって、モンゴル人の兵士を集めることに成功し、李守信の部隊とモンゴル人部隊からなる蒙古軍が編成された。徳王による独立運動は、関東軍と協力することで資金の問題を解決し、李守信と連携することで、政府の支えとなる軍隊を

有することになった。さらに、蒙古軍政府の成立前後に行われた募兵工作によってモンゴル人の部隊を拡充することができたことを確認した。

質疑では、議論の前提となる研究史や史料について確認が行われたほか、モンゴル側の主体性や募兵工作で集められた軍隊の実態について質問が出された。

諫早庸一（北海道大学）「**両海の覇者たち：ジョチ・ウルスにおける〈移動〉のポリティクス**」は、遊牧政権たるモンゴル帝国の根幹に関わる君主の〈移動〉について、近年の研究が「帝国の巡行」と「移動牧畜」とを区別して〈移動〉の可変性や重層性を論じながらも、ジョチ・ウルス君主の〈移動〉については、それをヴォルガ流域の南北移動に固定していることを踏まえ、ジョチ・ウルス君主たちの〈移動〉が、このように固定的なものであったのだろうかという問いを立てて考察を行うものであった。

ジョチ・ウルス初期の君主たちの〈移動〉については、ヴォルガ下流域のサライを冬営地として、夏は北上してウケク、あるいはブルガールまでも至っていたことが分かる。一方、後代の君主の〈移動〉に関しては、イブン・バットゥータ（一三〇四～六八年もしくは七七年）が、北カフカースの都市マージャル付近にあった時の君主ウズベク（治世一三一三～四一年）の幕営を訪問している。本報告は、この二つの〈移動〉を合理的につなごうとするものであった。黒海岸の敵対勢力を打倒し、カフカースの山岳民の脅威をも除いたトクタの時代（一二九一～一三一二年）以降、交易路は北カフカースを通過するようになる。こうした状況の変化のなかで興隆した都市のひとつが、クマ川沿いのマージャルであった。アゾフからも鉄門からも等距離にあったマージャルは戦略上の要衝でもあった。黒海とカスピ海の〈両海の覇者〉となったトクタの矛先はアゼルバイジャンにも向いていたからである。ジョチ・ウルス君主のカフカースへの東西移動はおそらくは一過性のものではなく、トクタの代に始まり、その後継者たちであるウズベク、ジャーニー・ベク（治世一三四一～五七年）といった〈両海の覇者〉たちによって実践されていたものであったと結論づけた。

質疑では、とくにマージャルの機能や位置付け、さらには大都・上都などモンゴル帝国の「首都圏」と比較した場合の相違点・類似点などが議論された。

齊藤茂雄（帝京大学）「**二〇二二年度キルギス共和国現地調査報告**」は、帝京大学シルクロード学術調査団ならびに科研費基盤研究（S）（21H04984）の一環として行われてきた、キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘調査の報告を中心に、アク・ベシム遺跡研究の概要を紹介した。

アク・ベシム遺跡では、唐が六七九年に建設したと考えられている第二シャフリスタン（砕葉鎮城）城郭から、建物が建っていたと思われる複数の基壇と、花柄の石敷き舗装路が発見されている。この舗装路は内外使節を供応した中心的建造物の中庭に使われたと推定する向井佑介説を紹介した上で、大石国から贈与される獅子が、砕葉鎮で唐に引き渡される予定だったことが読み取れる『旧唐書』巻八九「姚璹伝」（中華書局標点本、二九〇三頁）の記事を提示して、砕葉鎮が西方諸国との国際関係上、重要な窓口となっていた可能性を指摘した。また、ソグド人が建設した城郭であり、カラ・ハン朝期まで使用されたと考えられている第一シャフリスタン（スイアブ城）の東方キリスト教会跡の現況を紹介し、一〇～一一世紀に建設されたとするセミョーノフ説に反して、唯一第一シャフリスタン内に建設された宗教施設であることから、八世紀にカルルクを中心としたトルコ系の人々がキリスト教に大量改宗した際に建設されたとする山内和也説の紹介を行った。アク・ベシム遺跡は、様々な地域の文化が行き来した交通の要衝であった一方で、遊牧民の活動の痕跡も見られ、その複合的性格が発掘によって明らかになりつつある。文献資料の情報が少ない当地の歴史を解明するためには、今後ますます発掘調査が重要となることを指摘した。

質疑では、出土遺物や遺構に関する質問だけでなく、唐や西突厥との関係、アク・ベシム遺跡周辺の自然環境や立地についての質問が出された。

渡辺健哉（大阪公立大学）「モンゴル時代の「胸背」」は、近年、中国史の分野で、服や装飾品、とりわけ刺繍の研究が盛んになりつつあることを受け、胸部に施された刺繍、いわゆる「胸背」に関して、モンゴル時代における研究動向の整理と課題の洗い出しを行った。

まず前提として、モンゴル時代の胸背と明清時代の補子（胸部に貼付された方形の刺繍）とが異なることを確認した。次いで、「胸背」の実像について、文献史料から明らかになる事象、ペルシアの絵画や中国の出土資料を紹介した。以上の整理を踏まえて以下のように論点を整理した。①モンゴル時代の「胸背」は階級を識別するものではなく、デザインに過ぎなかった。②いわゆる「補子」は、明代から始まるといわれているが、『新編纂図増類群書類要事林広記』（至順刊本、椿荘書院本）、「大モンゴル『シャーナーメ』写本」、内モンゴル自治区正藍旗羊群廟元代祭祀遺跡出土の漢白玉石彫像等から、すでに元代後半期にはそうした意匠が出現していた可能性がある。最後に今後の課題として以下の四点――①ユーラシア史の文脈から、身分を視覚的に識別する「表徴」の実態、②中国服装史の文脈から、

「表徴」の合理的な運用としての「胸背」から「補子」への移行、③中国史の文脈から、「金元の移行」及び「元明の移行」をめぐる問題、そして④元朝史の文脈から、服制の改変が加えられた、世祖期と仁宗期の時代的特質――の解明が必要であることを述べた。

質疑では、図像や胸背そのものへの質問に加えて、朝鮮との比較や元朝期の身分制に関する質問が出された。

臼杵勲（札幌学院大学）・**木山克彦**（東海大学）・**佐川正敏**（東北学院大学）・**正司哲朗**（奈良大学）「**モンゴルにおける城郭・官衙・窯跡の発掘調査と瓦塼研究の成果**」は、四者を中心に近年進めてきたモンゴル国における発掘調査の成果報告である。

臼杵はトーラ川流域に位置する一〇〇四年設置の遼辺防三州の一つ鎮州関連と推定されるチントルゴイ城跡の年代や性格を解明するために、二〇〇六年からモンゴル初の遼代城郭の三次元測量と窯跡の部分発掘を行った。千田嘉博（奈良大学）は二〇〇八年からその窯跡を完掘して半地下式平窯であることと、北区東門跡を発掘して地覆石に乗せた地覆材のほぞ穴に立柱する構造であることをモンゴルで初めて解明した。この構造は、礎石に立柱する唐長安城城門などと異なる遊牧国家の城門の特徴である。その後、臼杵は二〇一四年から匈奴時代の瓦を使用した中国式土城が最も集中するヘルレン川上流域で匈奴国家中枢区と生産体制の問題を解明するために、ホスティン・ボラク2、3遺跡で窯跡の探索を続けてきた。その結果、後者で窯跡二基を完掘して半地下式平窯であることと、軒丸瓦が三〇キロメートル北のテレルジン土城跡出土例と同笵であることをモンゴルで初めて解明した。さらに、木山はオルズ川流域で突厥やウイグル可汗国による周縁支配の問題を解明するために、二〇一八年からシャルツ・オール1遺跡で主殿跡と東門跡を発掘してきた。本遺跡は長方形の築地内の中心に主殿を、その西側に後殿を、主殿の東側に広場を、築地東面に東門を東向きに唐尺によって計画的に配置している。東向きの配置がウイグル可汗国首都のオルド・バリク城宮城跡と共通し唐とは異なること、さらに蓮華文軒丸瓦の型式学的比較などから、本遺跡をウイグル可汗国の地方官衙遺跡と判断した。また佐川は瓦塼研究を、正司は遺跡・遺物の三次元計測を主導してきた。

質疑では、瓦を作成した職人の技術レベルについての質問や、各遺跡の立地、素材となる粘土の調達場所など周辺環境に関する質問が出された。

以上が研究報告の概要である。昨年と同じく、報告数は五本にせざるを得なかったが、幸いにして今年も、古代から近代まで、ユーラシアの東から西まで、時代・地域を広

くカヴァーする報告を揃えることができた。昨年につづき、ジョチ・ウルス史の研究報告があったほか、考古学の発掘報告や図像資料分析など文献資料に偏らない報告が多かったのも、喜ぶべきことである。質疑応答でも幅広いテーマや事例が取り上げられたが、支配者の移動や「首都圏」をめぐる分析視角、城跡や寺院跡、図像を分析する上での視点など、多くの研究者が共有しうる問題が提起された。ほぼオンラインでの開催ではあったが、最低限の研究交流はできたものと考える。

また、言うまでもなく、コロナ禍の長期化はとくに海外調査を必須とする研究分野には大きな打撃となったが、そのなかでキルギス共和国やモンゴル国などでの考古調査が再開されたことは朗報といえる。海外調査や留学も再開されつつあり、来年は一層充実した会になることを切に願う。

なお来年については、開催時期を例年より早め、六月最終週の週末（二〇二三年六月二三日（金）～二五日（日））に開催する方向で検討している。正式に決定し次第連絡したい。なお本会では継続して新たな参加者を募っている。参加を希望される方は、野尻湖クリルタイ事務局（altai.khuriltai@suma.kobe-wu.ac.jp）までご連絡いただきたい。

（山形大学人文社会科学部・教授）